

# 世界初のオリジナル製品を知財でアピール いつでも晴天!「人工太陽照明灯」の用途が広がる

## 事業内容

1984年設立。太陽光とまったく同じ光を放つ世界初の照明器具「人工太陽照明灯」の開発をはじめ、「魚類サイズ選別機」「車両ナンバー読取装置」等さまざまな独自製品を発売する企業。『進歩と貢献を楽しむ会社』という経営理念のとおり、その発想はあらゆる業種業界から支持され、役立てられている。

## 特許登録番号と内容

特許番号第 4850373 号	二酸化塩素式殺菌消臭装置
特許番号第 4298137 号	ライトガイド光源の光軸調整装置
特許公開 2008-157785	紫外線強度計
特許公開平 6-251887	写真撮影用人工太陽照明灯
商標登録第 1965411 号	セリック
意匠登録第 1086459 号	医療用人工太陽照明灯

他、特許登録、商標登録など多数(2013年4月現在)



代表取締役会長 佐藤泰司さん

## 世に役立つ新製品を創り出す、 研究開発企業として設立

「太陽光専門メーカーのセリック」として、多くの実績を持つ同社は、1984年当時既に数多くの特許や新技術を開発していた佐藤泰司さん(代表取締役会長、[公財]日本発明振興協会では常任理事を務める)が新製品を開発する企業として設立。太陽光とまったく同じ性質の光を人工的に作り出す照明器具「人工太陽照明灯」の発明は、あらゆる業界関係者に衝撃を与えた世界的大発明だ。既に、カメラ機器やフィルム、塗装、衣料、化粧品、印刷、食品など多くの業種業界で、色彩判定や色彩研究・開発・試験などの場に導入され、“色を正確に把握するため、必要不可欠な照明機器”としてその地位を確立している。

そもそもの発想は、佐藤さんの中学3年時の夏休みにまでさかのぼる。佐藤少年は、提出期限が翌日に迫る美術の宿題の風景画を、何とか仕上げなければならなかった。白熱電球の下、真夜中に描き上げた渾身の一枚。しかし、朝になってその絵を見て驚く。太陽光の下で目にしたその色彩は、自身が室内で見ていたものとはまったく違っていただけだ。「自分の目に写る色は、太陽光の下で作られる。本当の色は、太陽の光がないと見られないんだ」と実感した瞬間だった。

その後佐藤少年は、大手電機メーカーの凄腕の技術者に成長。その飛び抜けた発想力で数々の発明を形にし、新製品を世に送り出していく。「当時から『新しい製品=知的財産権』として登録することは、技術者としてごく自然のことだと思っていました」と佐藤さん。

## ずっと思い描いていたことを製品化 広くアピールしていくために知財を活用

同社を設立したのは、佐藤少年が抱いた太陽光に対する想いを、自分で形にしたいと思ったため。独立後取得した48件もの知的財産権は、人工太陽照明灯に関わるもののみならず、佐藤さんの能力を見込んで依頼された案件の中で生まれた財産でもある。「知的財産権の取得は、技術を防御するという意味がありますが、新しい技術だとアピールできるものでもあります」というのが、佐藤さんの知的財産権に対するスタンスだ。

人工太陽照明灯は、会社設立2年後に1号機を開発し特許を出願。パンフレットには特許出願中と記載することで、他にはない新しい技術であることをアピールした。商談を進める社員も、「画期的なもの、優れたものを扱っている」という自負が生まれたという。その後、「今までになかった優れた製品」「可能性が高まる製品」と評され、1990年のジャパンショップ賞受賞を皮切りに、発明大賞、科学技術庁長官賞、さらには黄綬褒章

## COMPANY DATA

所在地：本社 / 東京都中央区入船三丁目 1-2-505  
 電話番号：03-3555-2261 URL：http://www.serico.jp/  
 創業：1984年12月 設立：1984年12月 資本金：：5700万円  
 売上高：非公開 従業員数：13名(2013年4月現在)



SOLAX 100Wシリーズは、晴天時、正午±2時間に地表に到達する太陽光と同じスペクトルの光を出す



左から、白熱灯、蛍光灯、人工太陽照明灯で照らし、光源による色の見え方を比較。その違いは一目瞭然た



集合形の人工太陽照明灯。大面積、高品質、高照度の照射を実現し、組み合わせも自由自在

を次々に受賞。高価で売れないのではないかとこの心配も杞憂に終わり、メディアへの登場回数と比例するように、さまざまな業種業界からの問い合わせが相次いだ。

メディアへの露出に加えて、佐藤さんは理論的な裏付けの確立にも積極的に取り組んだ。「色彩を正確に判別するための光源はどうあるべきか」人工太陽照明灯のメカニズムを理論的に説いた論文を執筆。色彩工学コンファレンスや国際色彩学会など、色彩の専門家が数多く集まる機会を捉えて次々と発表していく。そしてこの製品への評価を確固たるものとした。

## 顧客のニーズを細やかに把握し、 人工太陽照明灯の可能性が広がっていく

人工太陽照明灯の代表的な活用例が、写真フィルムメーカーの色彩品質試験である。色彩の具合を確認する品質試験は、太陽光の下で行うことが必須のため、従来は天気の良い悪しに左右され、晴天を求め日本全国を飛び回っていた。しかし人工太陽照明灯があれば、24時間365日室内で試験ができる。関係者の誰もが脱

帽する画期的な発明だった。

また、昔から太陽光に当たると直りが早いと言われていた、床ずれやアトピー性皮膚炎などの治療を目的にした医療用の人工太陽照明灯を開発。厚生労働大臣承認機器として発売し広く普及している。さらに美術館や画廊などの室内では、太陽光から画材に悪影響を及ぼす紫外線のみを排除した製品を開発。他にも、塗料や印刷、ファッション、化粧品、食品など人工太陽照明灯の活用はキリがない。

どの案件に対しても顧客の用途や試験内容、照射対象物などを細やかにヒアリングし最適なものを作成。顧客満足の創出とともに知的財産権を活かし発展させているのだ。「実は、人工太陽照明灯の用途がこんなに広いとは思いませんでした」と佐藤さん。知的財産権を取得しながら、それを上手にアピールしていくことで、想像をはるかに超える活用場が広がっていった好事例となった。既に海外との取引もスタート。今後ますます目が離せない製品だ。

## 知的財産活用のポイント

### 「守る」「アピールする」「拡がる」「信用を得る」 知的財産権取得で多くのメリットを手に入れる

同社の知的財産活用のポイントは、アイデアや技術を「守る」と共に、新たな製品を「アピール」した点だ。それまで世の中になかった製品を知財を使ってアピールしたことで、様々

な業種業界から注目され想定以上の用途を上げられたことは、同社の大きな財産になった。模倣品が現れたこともあったが、次第になくなったという事実が、簡単に真似られない製品であるという高い技術力の証明になり、結果として取引先への「信用」を勝ち取ることに繋がった。